

## 『陶淵明考』 (其一) 東と西：漢詩の英訳 (3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 信夫, 大木, 俊夫, Kelley, David B., Alexander, Martha L. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/195">http://hdl.handle.net/10271/195</a>

## 『陶淵明考』 (其一) 東と西 : 漢詩の英訳 (3)

櫻井 信夫<sup>\*</sup>・大木 俊夫<sup>\*\*</sup>・David B. Kelley<sup>\*\*\*</sup>・Martha L. Alexander<sup>\*\*\*\*</sup>  
(名誉教授・英語・英語・英語)

### Contemplations on Tao Yuan-ming (Part One)

### East and West : An Experiment in Poetic Translation (3)

Nobuo SAKURAI<sup>†</sup>, Toshio OHKI<sup>\*\*</sup>, David B. KELLEY<sup>\*\*\*</sup>, Martha L. ALEXANDER<sup>\*\*\*\*</sup>  
(*Professor emeritus ; English*)  
(*English ; English*)

**Abstract:** Tao Yuan-ming (c.365-427), a Chinese poet and regarded by modern critics as the most important of his period, in his own time, was said to be and has generally been believed ever since to be a recluse or hermit far from the "madding crowd". In his actual life, however, he was most likely an ordinary man, who yearned for a beautiful woman at around age thirty, after his first wife died (The Song of a Graceful Love), loved home-life and liquor (My Sons; Autumn in the Countryside), and grumbled in his old age about unachieved ambitions and the frustrations he once felt in his youth (Twelve Miscellaneous Poems; Nine poems in the Old Style: No 8). He candidly expressed all those human feelings in his poems. By taking him for an ordinary man, rather than just a poet lacking such mundane interests one can get a better appreciation of some of his poems.

### はじめに

旧制中学の漢文を学んだ者が陶淵明と聞けば、隠遁の田園詩人であり、完全に朗詠できるとは限らないが、彼の詩句の二つや三つを暗誦できる者は少なくない。「菊を採る東籬の下 悠然として南山を見る」とか「盛年 重ねて来らず 一日 再び晨(あした)なり難し 時に及んで当(まさ)に勉励すべし 歳月は人を待たず」とか「帰(り) (帰)んなんいざ田園まさに蕪(あ)れんとす なんぞ帰らざる」等々。

しかし、第一の詩句は、「この頃は夜長になって、偶々名酒が手に入ったから、毎晩飲んで、たちまち酔って、幾つかの詩句を作って独り楽しんでいる……」と序文した「酒を飲む二十首」と云う連作の第五首であるが、其れと教えられた人は少なかった。第二の詩句は、若い時代は短いのだから勉励すべしと戒められたものである。ところが、原詩を見れば、此の最後の四句を取り出して戒めの詩とするのは見当違いで、其の前の二句は「飲を得ば 当(まさ)に楽しみをなすべし 斗酒 比隣を聚(あつ)めよ」(嬉しい時には 酒をごっすり 隣近所

と飲んで楽しむ)と云う。いわば、「酒を飲むなら若い内」と、若者への飲酒の勧めなのである。最後の詩句は、日本においては多くの人々に愛誦された漢詩句の一節で、陶淵明を酒を愛した脱俗の田園詩人としたところの「帰去来兮辭」の初二句である<sup>1)</sup>。

淵明が貧乏で苦しんでいた時、財産を作るのには縣令(県知事)になるのが一番手早い処世術であると親戚、友人が勧めて呉れたが、彼には其のような手蔓が無かった。そこで、親戚の者が手を回し、彭澤縣の縣令になることができた。しかし、彼は縣令に着任して間もなく辞めたくなるような経験をしたらしい。生活の為に理想を捨てて縣令になっては見たものの、東晋時代の風習としての役得、賄賂を平然と受取ることになれていなかったであろう彼は、恐らく赴任した途端、早々と多額の賄賂を贈られて困り果てたのではなからうか。実際には、彼自身が蓄財の為に裏門から県知事になったのであり、強いことを言える立場にはなかった。漢の武帝が、役得、賄賂で蓄財したと云う密告によって御史大夫(三公の一、副丞相)張湯を誅し自殺させた時、彼の家には五百金に満たぬ武帝下賜の品が残っただけで、其の他の財産が殆ど無く、武帝は後悔し、密告者を死刑に処した(前115年)。また、右輔(ゆうほ:首都西部副長官)王温舒一家を誅殺した時には、役得、賄賂によって蓄積した千金の財が積まれていた、と史記(酷吏列伝)は記載している。淵明は帰去来兮辭序に「私の本性は自然率直で、矯(to falsify, forge)して事実を曲げ、捏造して迄励むと云う習性には染まっていないから……」と述べている。しかし、「銭能通神」とも賄賂を交際の礼儀とも考えて居る社会では、新任県令が役得稼ぎに精を出してきてくれなければ上級者も下僚も体裁良く稼ぎ難いので、陰に陽につつかれ、彼も其の習慣を続けたに違いあるまい。彼自身は、「其の習慣に染まっていなかった」と書いて弁明し、着任して僅か八十日後に妹の死を口実に辞任したと云う。梁の太子蕭統の「陶淵明伝」が挙げた別の理由については、後述する。

前述の武帝朝の例だけでなく、以下の事例は此の推理を示唆する。先の大戦中、関公平教授(亜細亜大)が当時の華北地方政権王克敏主席に強く望まれて秘書をした一時期、就任した途端自宅に多額の賄賂を届けられ、日本人として其の習慣の体験が殆ど無く、吃驚して其れを返すのに非常に苦勞したことを著者の一人櫻井は長男の方からの話で聞き知った。結局、同氏は暫らくして辞任したが、何故であったかは伝えられていない。此の話を聞いた時、「帰去来兮辭」の序文其の儘だなと感じたものである。「官倒」と名付けられた此の官途、行政組織にある者の役得の悪弊は、古今を問わず中国で習性化してしまったものであろう。現中国における其れ等に就いての資料は容易に見出すことができる。我国でも、歴史的に見て藤原氏執政時代には公然と大同小異の状況があったであろう。武家執政時代に於いても密かに行われたであろうが、見栄であっても「武士にあるまじき所業」として公然と習性化した習慣にはならなかったのではないか。最近の官僚に迄は殆ど及んでいないであろうが、国会議員になると財を成すと云うのは権限に伴う金銭感覚の鈍麻で、我国でも習性化したと思わざるを得ない。

我々が、戦前の中等学校教育の中では教えられなかった陶淵明の詩賦に「閑情賦」がある<sup>1-b)</sup>。

これは彼が最初の妻を亡くし、再婚する前の三十歳の男やもめの時期に作ったと云われ、女性を思い浮かべて妄想を逞しくした長歌である。

彼は妄想の中で美女に語り掛ける。

……城を傾ける（傾城）ほどの美女が独り暮らしている。美しい眼をまばたいて流し目をし、物言い掛けているようだ； 彼は願う、できることなら、膝を接して話し合いたいと。此の辺からは、読む者を少し気恥ずかしくさせるほどの妄想ぶりである。

……なれることなら、あなたの上着の襟になって、美しい頭の残り香を嗅ぎたい。……スカートなら帯になって、其の柳腰を締め付けたい。……髪なら髪油になって…、……眉なら眉墨になって…、……寝床なら花むしろになって…、……生糸なら履（くつ）になって…。……なれるなら××になって、と全部で十個の願いを書き連ねている。

梁の昭明太子蕭統は、陶淵明はこんな賦を作らなければ良かったのにと嘆いた。日本でも、異性への思慕が道徳ある人への思慕の比喩として歌われることがあるのだから、言葉がなまめかしいほどには彼の心情はなまめかしくはなかったであろう、という弁護論もある<sup>3)</sup>。しかし、此等の意見は、どうも淵明を酒を愛した脱俗の田園詩人と決めて、そっとして置きたい心情からの意見のようにも感じられる。陶淵明は、責子（子を責める詩）の中で「俺の子はどれもこれも出来が悪いなあ」と嘆きながらも、実際には詩の題とは裏腹に、慈愛に満ちた情を湛えて其の子らを眺めつつ、酒を楽しんで居たのであり、また、止酒（酒を止める詩）で実際には止めることが出来ない程の酒への愛着を詠んだのと同じく、「閑情賦」には彼の赤裸々な人間性が表現されていると考える。だからといって、彼の人間性を傷つけるものとは思われないのである。

筆者らが<sup>6)</sup>、此の小論において、其の人間性、民族性に視点を据えて陶淵明の詩賦を検討し英訳することは、既著<sup>4,5)</sup>と同じである。現代になって、中国では古くから詩文選集や摘句によって好ましい部分のみを採り上げて来たので誤った判断をしたが<sup>6,7)</sup>、別の見方をすれば、淵明は恐らく今までの説とは違った人物になるだろう<sup>8)</sup>、と視点を変えて考察すべきことを指摘したのは魯迅であった<sup>6,7)</sup>。しかし、魯迅の指摘するところとは言え、主として著者の一人櫻井の非専門家ゆえの独断的な解釈や誤りも多いであろう。加えて、難解な陶詩の英訳に当たっては、既に第一篇で記述したように、それぞれの言語に特有な伝統的形式の存在を認めた上で、可能な限り原作に対応する英語による表現を求めると云う立場を固執した。大方の御叱正を得られれば幸いである。

## 第一章 陶淵明—出自と其の人

陶淵明、潯（尋）陽（江西省九江県）柴桑里の人、東晋哀帝の興寧3年(365)年生まれ、字は元亮。宋代になり潜と名のり、淵明を字とした。宋文帝の元嘉4年(427)悪性マラリアにか

かり、63歳で没す。東晋時代の長沙郡公で大司馬（軍事を司る最高の長官、三公の一）陶侃が父方の曾祖父で、母方の祖父は晋の征西大將軍桓温の長史（総務長官、幕僚長）孟嘉、其の妻は陶侃の第十女であった。淵明の母は孟嘉の第四女である。彼は此の二人の先祖を誇としたが、彼の時代には既に落ちぶれて貧乏になり、詩人らしい誇張であろうが、飢えや寒さに悩んだと後に述懐している。とは言え、帰去来兮辭の中で「田園まさに蕪(あ)れんとす」と故郷に帰れば、なるほど庭は荒れかけていたが、召使いは飲み迎えてくれ、部屋に入れば樽一ぱいに酒が用意されていた、と我々の考える貧乏とは尺度が違っていることに留意すべきであろう<sup>1,3,6,7,9)</sup>。

彼は東晋王朝の衰微滅亡を嘆く詩を幾つか書いているが、彼が本当に晋王室への忠心を持って居たかと言う点については大きな疑問が残る。生真面目な彼が官吏の一員として王室の為に尽くそうと考えたとしても当然である。しかし、自らの家系に誇を持っていた彼は、尊敬する先祖の一人大司馬長沙郡公陶侃は寒門（貧乏階級）出身から成り上がった実力者の武人で、晋王朝に禪譲を迫って帝位に就くことを望んでいたが老齡の為に挫折した人であり、もう一人の孟嘉が高級官僚として使えた桓温もまた王位を奪おうとした軍閥であったことを知っていたからである<sup>6,9)</sup>。青年の客気、劍を撫して、独り諸方を意気盛んに旅行した時（擬古第五首）、其の大望は何であったろうか。

三世紀末から四世紀初頭に黄河流域の中原にあって洛陽を都としていた西晋は、騎馬民族の胡族の侵入によって滅亡し、揚子江流域に南渡過江して逃げた。晋王族の一人司馬叡は貴族の助力で、同様に江南地方に避難逃亡し移住してきた中原人集団（漢族）を基礎に318年に建康（現：南京）を都に、東晋王朝を樹立した。中原人は、自らを（中）華として彼等以外の人々を夷（狄）と侮蔑する。東晋は、流浪の集団として上は王室、貴族から下は庶民に至るまで何時か必ず中原の故郷に戻ろうと夢想しつつ、中原人として政治文化の本流であるという過剰意識を持ち続けた排他性の極めて強い集団であった。彼等は先住者の江南人とは別個に集落を形成し、部落名も街路名も故郷と同じく命名し、戸籍には本貫として故郷の住所（白籍）を記載し続けた。彼等にとっては、東晋其のものが仮の寓居国家であり、現在居住している国家は生活の為、利殖の手段としての対象に過ぎない。支配機構を独占した王室と貴族階級とが、自分の利益の為に租税の着服横領、役得・賄賂、売官・売爵と、蓄財の為に権力を乱用したのは当然である。彼等が本貫の地への帰国を断念してからも、望郷の向前看（希望）が向銭看（拝金）に変わってしまった悪習が続き、亡国に繋がったのであった<sup>10,11)</sup>。

千七百年を隔てた現在、台湾に旅行すると何処に行っても街路名が中国大陸の市町村か大陸人の名前で、戸籍には本貫として故郷、或いは先祖の故郷と推定した大陸における省名を記載させている。漢族は其の周囲の夷民族が漢字文化に同化された時、此れを漢民族と呼んでいる<sup>12)</sup>。しかし、外面的にはいざ知らず内面的には千七百年たっても夷民族であった人々に対しては、夷民族としての標識を外さないことに留意すべきである<sup>6)</sup>。陶淵明のひととなりを考える時、此の中原人の習性が及ぼす影響についての考察を忘れてはなるまい。

淵明の誇とする陶侃は、寒門出身であったことに加えて夷民族出身でもあった。東晋建国初頭(327)の冠軍將軍蘇峻の反乱の際に、幼帝を都の西郊石頭に連れ去られ、朝廷が転覆の危機にさらされて大混乱に陥った時、征西大將軍陶侃は蘇峻の討伐平定に大きな功績を挙げた。しかし、貴族達は七十歳にもなった老將軍に対して感謝と尊敬とを全く持っておらず「溪狗」(溪族の山犬野郎)と陰口を叩いて罵り軽蔑した(「世説新語」容止篇)<sup>13)</sup>。宰相庾文康と温忠武とが陶侃に救いを求めた時、彼が「肅祖顧命不見及：肅祖の遺詔を私は受けていない。」と怒鳴りつけている。此の言葉は、晋の明帝司馬紹の遺言によって宮廷貴族の中心人物王導はじめ庾文康、温忠武らが後事を託されたのにもかかわらず、陶侃が全く無視されたことに対する憤りを述べたのであった。其の後に、温忠武が「溪狗我所悉：あの溪族の山犬野郎のことは、私がなんでも良く判っている」と庾文康に言ったことが記載されている。此の侮蔑こそ、肅祖の遺詔で陶侃が除外された理由を示すものといえよう。唐代に編纂された「晋書陶侃伝」は「士行(陶侃の字)は望(家柄)世家に非ず、俗は諸華と異なる」と、世襲貴族ではなく中華に属する人間でもないと記述している。千六百余年を経て、陳寅恪(ちんいんかく)は1943年の論文で「江左の名士である陶侃や陶淵明は溪族の出身である」と記載し、更に、陶侃はもと漁をなりわいとする賤民の出身である、と述べていると云う<sup>6,9,11)</sup>。溪族を賤民と決め付けた此等の記載は、夷とした少数民族に対する華人の民族的偏見からの軽侮を示している。

古来、中国では「隱者」「隱士」「逸民」等々、隱遁者を高尚な人々として異常な迄に称賛してきた。人々は、科擧の試験に合格して(其れ以前では地方官の推薦により)官吏に登用され名誉と財産とを手に入れることを現世における最大の望みとした。官吏にならなかった人々は無名とされた。陶淵明も父の名前を書き残していない。父が官吏にならなかったからであろう。此のような官僚社会を無視し、山野に隠れ住むと云う苦難を自らの主義主張の為に選び取った読書人こそ無私無欲、無為自然の卓抜なる思想の実践者と見做したのであろう。陶淵明は生きている間から隱遁者として其の名を知られ、後世「古今隱逸詩人の宗(そう)」と絶賛されたのであった<sup>3,14)</sup>。

しかしながら、陶淵明は本当に隱遁を望んでいたのであろうか。50歳頃の作と云われる「雜詩十二首：其五」では残り少ない人生を思い青年時代の客気をさらっと詠じているが、56,7歳頃の「擬古九首：其八」は彼の人柄その儘に正直に、青年時代の壮大なる客気と其の後の重苦しい挫折とを告白している。淵明56歳の永初元年(420)、経世の客気を持った若かった時代に、劉裕とは共に軍閥劉牢之の參軍(幕僚)として勤務したが、淵明から見れば無学粗野な成上がり過ぎない其の劉裕が帝位について自ら武帝と称し、国号を宋としたのであった。其の間の経過の差が詩に現われ、「擬古九首：其八」の終句の挫折の嘆きになったものと考えても差し支えないだろう。此の客気から隱遁へとは、単純に結び付かない主題なのである。

雑詩十二首：其五 Twelve Miscellaneous Poems: No.5 Tao Yuan-ming

憶我少壯時	I recall the days of my youth,
無樂自欣豫	I lived contentedly without any particular enjoyment.
猛志逸四海	My passion extended to the four seas,
騫翮思遠翥	I aspired to soar far on my wings.
荏苒歲月頽	The years went by and then,
此心稍已去	My will slowly faded away.
值歡無復娛	In mirthful sprees I found no pleasure,
每每多憂慮	Encumbered by a heavy heart day by day.
氣力漸衰損	My strength of will declined,
轉覺日不如	Day by day I realized it was not the same,
壑舟無須臾	Time shot like a boat through a narrow gorge
引我不得住	pulling me unrelentingly toward decrepitude.
前途當幾許	I do not know how my years are numbered,
未知止泊處	Nor the harbor for my anchorage.
古人借寸陰	The ancients never slighted even a minute,
念此使人懼	Thinking of this makes one tremble.

擬古九首：其八 Nine Poems in the Old Style: No.8

少年壯且厲	Strict and vigorous I was in my youth,
撫劍獨行遊	A sword I held, travelling alone about the country.
誰言行遊近	It was not an excursion but rather an expedition
張掖至幽州	from the western to the eastern end of the world.
飢食首陽薇	Satiating my hunger with the roots and barks of wild plants,
渴飲易水流	Appeasing my thirst with river-water.
不見相知人	I saw no like-minded people,
惟見古時丘	Except the ancient hillocks.
路邊兩高墳	Two burial mounds I saw by the roadside,
伯牙與莊周	Where great men lay buried, faithful to their late friends.
此士難再得	For such noble spirits so rare, then,
吾行欲何求	What did I pursue on this long journey ?

淵明の詩に現われた行動と思考の矛盾についても、隱遁への志望や隱遁後の生活への不平不満についても是迄の意見に対して、非専門家ゆえに考証が不充分的の為もあるが、やや異なっ

た見解を懐かざるをえない。彼の家は貧しかったとは言っても、祖父もまた武昌太守を務めた士族の家であり、「古川に水絶えず」の古諺通りで、召使いも居る余裕ある生活の中で幼少年期に充分経学を授けられたと考えられよう。李長之が引用した陳寅恪の論文に基づくならば、彼は漢族が多数居住する地域で生まれ育ったと考えられる。したがって、華人から漢族として見下されるような屈辱感を味わう経験は少なかったろうが、観念的には自分の部族が中原人から賤民と見下される部族であることは知って居たと思う。其の時代の彼は見下されまいと勉学に励んだことであろう。陶詩の難解さは其の勉学の成果を示すと共に、そこで蓄積した知識を彼がひけらかしたとも言えよう。曾祖父、外祖父、は武人、高級官僚として輝かしい貴族、名族であり、祖父もまた要衝の地武昌の太守を務めた士族の家であると云う強烈な誇りと自尊心とを彼が持っていたことは確かであろう。其の自尊心からであろうが、屈辱の経験を詩賦に書き残しては居ない。淡泊静謐と言われた控えめな人柄の内部に此の強烈な自尊心を秘め、自分よりも素養のない人々から加えられる理屈抜きの民族的侮辱と、多くの場合平静さを装って其れに耐えねばならなかったであろう無念さを考えれば、彼が激しい憤りを懐いていたことは想像に難くない。彼が前述の二首の詩篇に書き記した剣を撫し猛志を懐いて長途の旅をした若い日々こそ、偉大な二人の先祖を思い浮かべて、屈辱感と無念さをもって耐えに耐えた数々の侮辱への憤りを噴出させた一時期であったに違いない。其の頃作ったのか、猛志の歌（讀山海經其十）は激し過ぎ、難解過ぎて英訳出来ない。しかし、司馬氏、王氏、謝氏など北からの過江門閥貴族達が、彼等には寓居国家に過ぎない東晋に張りめぐらした支配機構の中で夷民族の貧乏士族が其等の華人貴族に其の存在を認めさせるには、先祖陶侃の歩んだように武人の世界で功名を挙げるのが唯一の道であった筈である。とは言え、此の道は本来読書人の淵明にとっては、努力したとしても無縁の生き方であった。

次の詩は、東晋安帝の義熙14年(418) 淵明54歳の作で、青年時代からの不幸の数々を並べ立て、終句では州府の役人に“おだて”ともとれる「判ってくれるのは、貴方がただけである」とまで言っている。隠士として良くまあ此処まで愚痴を並べ立てたものよ、とも思うが、隠遁者といっても生(なま)身の間人である、天真爛漫な愚痴振りは見事な迄に全く体裁振らない。

怨詩楚調示龐主簿鄧治中

Grumbling with Age

天道幽且遠	Heaven is the infinite existence, being hard to difine,
鬼神茫昧然	And the Spirits impalpable and misty, too.
結髮念善事	I cherished doing good deeds from my youth,
僂俛六九年	For fifty odd years I have endeavored to do so.
弱冠逢世阻	Evil days broke out in my twenties,
始室喪其偏	And I was bereaved of my better falf at thirty.
炎火屢焚如	The long drought scorched the ground again and again,



螟蟻恣中田	Vermin swarmed in the fields.
風雨縱橫至	Sometimes, the wind blew hard and it rained heavily,
収斂不孟盈	The harvest failed.
夏日長抱飢	On summer days I suffered from hunger,
寒夜無被眠	On winter nights I slept without coverlets.
造夕思鷄鳴	In my blind hunger, I awaited the cockcrow in the evening,
及晨願烏遷	And the sunset in the morning.
在己何怨天	For all these retributions I curse not Heaven but myself,
離憂悽目前	For such evil days I am disgusted with myself.
吁嗟身後名	Ah! Not for me, is fame after death,
於我若浮煙	to me like floating smoke in the sky.
慷慨獨悲歌	I recite alone the grievous elegy,
鍾期信為賢	Only you share these feelings of mine.

此の詩で「在己何怨天」以下終句までは、別の意味で重要な詩句である。「離憂悽目前」と現在の惨めな生活を嘆き、「吁嗟身後名、於我若浮煙」と現世での楽しみに未練を残している。他方、63歳で死亡する前に自らを弔う「自祭文」(次篇)を作り、他の人々は「在為世珍、没亦見思：生存中は讃えられ死後も慕われるのを望むが、私は違う」と達観の言葉を綴り、「陶子將辞逆旅之館、永歸於本宅：仮のやどりの此の世を辞して、本来のすまいに帰ろうとしている」と述べた。しかし、「人生実難、死如何、嗚呼哀哉：人の世は何と難しいものよ、死とはどんなものやら、あゝ哀しいね」と、隠遁者淵明にして此の言葉を残すとは、と困惑させる結びではあるが、此の終句の方が正直に言い残した本音なのではないか。淵明を特別な人とまつり上げるのではなく、身近な普通の隣人として考えては如何なものであろう。次篇の主題ではある。

## 第二章 愛

淵明の詩は妻や子について書くことが少ない。「責子」(子を責める詩)は、目の前に居る俺の子供達は出来が悪いよと言いつつ、でも可愛い奴等さと眺めながら、一杯飲んでいる彼の顔が思い浮かぶ。妻子に触れている数少ない詩の中で「郭主簿に和す：第一首」では、「春秫作美酒 酒熟吾自斟 弱子戲我側 學語未成音 此事真復樂：手作りの粟酒の美味を独酌で味わいながら、かたわらでまだ片言しか喋れない幼い子が遊んで居るのを眺める。こうした事は、本当に楽しい(英訳略)」と独り言を言って居る。知人の劉遺民に宛てた詩、「酬劉柴桑」で

は、「秋が来た。向日葵も熟した。稲の実りも宜しい。今日は良い天気だ。妻よ、幼な子の手を引いて、山遊びに行くとしようか!」と、彼は体裁振らずに家族への愛を表わして居る。徹底した男尊女卑の当時であっては、妻への感謝を明らかに述べることなど認められるべくもないが、此の詩を読むと誰しも彼の心底に在る思いを感じ取れるであろう。「婦去来兮辭」でも、単身赴任で留守にして居た父が三月振りに帰って来たのを喜んで纏い付く幼い子の手を引く優しい父親である。彼が此のように詩の中に書き留めた優しさ、特に著しい子煩悩振りは、なおさら人々の敬愛の心を誘うものとなったに違いない。

責子

My Sons

白髮被両鬢	White hair hangs over my temples,
肌膚不復實	My skin is wrinkled.
雖有五男兒	Though I have five sons,
總不好紙筆	None have taken to paper and pen.
阿舒已二八	A-Shu is sixteen,
懶惰故無匹	He is conspicuously lazy.
阿宣行志学	A-Xuan is close to fifteen,
而不愛文術	And he, too, dislikes composing.
雍端年十三	Yong and Duan are thirteen,
不識六與七	They can't tell six from seven.
通子 <sup>*</sup> 垂九齡	Little Tong (Dong <sup>*</sup> ) is nearing nine,
但覓梨與栗	He always clamours for pears and nuts.
天運苟如此	If this be my destined lot,
且進杯中物	I might as well take a drink of wine.

\*通子 (Tong-zi) : 佟 (Dong, Wade 法は T'ong) の幼名。どちらも第一声で、発音の有気、無気音の相違は、幼児語の発音を其の儘写したものであろう。例えば、博子ちゃんが自身自身を「オコちゃん」、久ちゃんが「チャアちゃん」と呼ぶのと同様であろう。

酬劉柴桑

Autumn in the Countryside

窮屈寡人用	Living remote from others, few come.
時忘四運周	Sometimes I am not aware of the round of seasons.
欄庭多落葉	Finding withered, fallen leaves in the village,
慨然已知秋	I realize the advance of autumn.
新葵鬱北牖	The sun-flowers packed with seeds cast shadows on the north windows,
嘉穠養南疇	And ripe ears of rice nod in the south fields.

今我不為樂      If I miss this best of seasons,  
 知有來歲不      Who knows about the next or not ?  
 命室携童弱      My wife, get the little children,  
 良日登遠遊      Let's stroll around the hills this sunny day.

陶淵明は詩文の中で一事を除いて、彼自身の思いを率直に述べ、生真面目そのものである。除外しているのは、彼自身の属する溪族への夷民族、賤民との蔑視に対する憤りである。誇とする曾祖父陶侃が東晋王朝の危機を救った元勳であるのにもかかわらず溪狗と侮蔑され、彼自身も仕官しても常に出世の道を閉ざされ、「帰去來兮辭」に述べた辞職の理由が真実では無いと云うのも、悉く民族的差別に基ずいたものと考えの方が妥当であるにもかかわらず、彼が自尊心から其の事に触れるのを故意に避けたのであろう。

最初の妻が乳飲み子を残して亡くなった。分娩後の産褥熱で死亡したのではあるまいか。ゼンメルワイス (1818-'65) が産褥熱は敗血症であり、塩化カルシウム液での手の消毒で予防出来る事を発見する迄の分娩は、常に敗血症死の危険を孕んでいた。彼の再婚が急いだものと思われるのも、そうした事情があつたのことでなかったらうか。

「閑情賦」と云う艶(なまめ)かしい詩を、三十歳の男盛りの鰥夫(おとこやもめ)が若い女性を夢想して独り寝の夜眠られぬ儘に妄想を逞しくして作ったからといって、不謹慎とそしめるのは最負(ひいき)の引倒しではあるまいか。道徳振った表現も、再婚してからの妻への遠慮と云うものであろう。彼は時々不眠症に悩まされたようである。五十歳頃に作った「雜詩十二首: 其二」で、独りわれと我が影に酒を勧め、淋しさに「終暁不能靜: 夜が明けるまで心が落ち着かなかつた」と不眠を繰返し訴えて居る。隱遁者として既に世に知られてもなお自分を飾ろうとはしなかつた生真面目な彼である。「閑情賦」も彼の正直な告白であり、少しばかり道徳振ったとて、照れている彼の姿を思い浮かばせる。

#### 閑情賦 并序

初，張衡作定情賦，蔡邕作靜情賦，檢逸辭而宗澹泊，始則蕩以思慮，而終歸閑正。將以抑流宕之邪心，諒有助於諷諫。

綴文之士，奕代繼作，並因觸類，廣其辭義。余園閨多暇，復染翰為之。雖文妙不足，庶不謬作者之意乎。

#### The Song of a Graceful Love      Tao Yuan-ming

Once Zhang Heng wrote "The Song of the Achievement of Love" and Cai Yong followed with "Quiet Love". Both of them retained their indecent diction and made candour a principle of their styles. They opened with a display of unfettered and extravagant passions but finally attained neat and refined lines. Eventually it seems

to be that they tried to curb wicked desires and fast living and tried to be helpful by admonishing in a roundabout way.

The following writers successively referred to this subject. Since I had a lot of leisure hours in my country life, I composed this sort of lyric poetry. I am not capable of such rhetorical flourishes and hope that I may not be misled about the intentions of the former writers.

夫何壤逸之令姿	How beautiful you are
獨曠四以秀羣	with no equal in the world!
表傾城之艷色	Your glance captures a king's city.
期有德於傳聞	To the whole kingdom I will applaud your virtue.
佩鳴玉以比潔	Your purity is like jade
齊幽蘭以爭芬	And more aromatic than the orchids of the valley.
淡柔情於俗內	Your feelings are weak toward mundane affairs,
負雅志於高雲	Your elegance rises above the clouds.
悲晨蟻之易夕	It is only too true, The morning light does soon fade to the twilight,
感人生之長勤	And how long the torments of our lives go on !
同一盡於百年	Since our days are numbered within a hundred years,
何歡寡而愁殷	Why are joys so few and agonies so heavy ?
塞朱幃而正坐	Drawing the vermilion curtains, you sit upright,
泛清瑟以自欣	Playing the harp, you amuse yourself.
送纖指之餘好	Your slender fingers make a sweet melody rare to the ear,
攘皓袖之續粉	Your bright sleeves flutter like falling flowers.
瞬美目以流眄	You glance askance with your enchanting eyes,
含言笑而不分	You inscrutably smile.
曲調將半	When the tune is just half done,
景落西軒	The evening sun sinks below the western eaves.
悲商叩林	Autumn winds strikes the grove,
白雲依山	White clouds snuggle up to the mountains.
仰睇天路	Gazing for a while at the empty sky, then,
俯促鳴絃	Your eyes fall to your harp and you play on.

神儀憺媚	How bewitching you are,
拳止詳妍	How elegant!
激清音以感余	The sweet tones of your harp move me,
願接膝以交言	I long to talk with you,
欲自往以結誓	To step forward and swear my love,
懼冒禮之為愆	But wait for fear of offending.
待鳳鳥以致辭、	As the ancients, I should find a phoenix, a herald,
恐他人之我先	Worried that others might propose to you.
意惶惑而靡寧	My thoughts about you, the tumult within me makes me uneasy.
魂須臾而九遷	My soul trembles swiftly at the moment.
願在衣而為領	I wish I were the lapel of your robe.
承華首之餘芳	I would smell the fragrance of your hair.
悲羅襟之宵離	But when you retire, you disrobe yourself of sheer silk.
怨秋夜之未央	I resent a long autumn night.
願在裳而為帶	I wish I were the sash of your skirt,
束窈窕之纖身	I would clasp your slender waist in my tight embrace.
嗟溫涼之異氣	Too bad clothing depends on the season!
或脫故而服新	You change without a second thought.
願在髮而為澤	I wish I were the shine on your hair.
刷玄鬢於頰肩	I would comb your raven locks over your shoulders.
悲佳人之屢沐	But beauties wash themselves so often,
徒白水以枯煎	The shine on their hair would be washed away.
願在眉而為黛	I wish I were a paint brush to shape your eyebrows,
隨瞻視以閑揚	With your eyes I would gently rise and fall.
悲脂粉之尚鮮	You take delight in always being lovely,
或取毀於華粧	Removing the color, you reapply your makeup.
願在莞而為席	I wish I were a cattail mat on your bed.
安弱體於三秋	So you could lie down calmly on me through the hot season.
悲文茵之代御	Getting cooler, the mat of tiger skin would take my place,

方經年而見求	I have to wait for a year to serve you.
願在絲而為履	I wish I were silk thread to make your shoes.
附素足以周旋	I would cover your bare feet and walk with you,
悲行止之有節	But your daily movement is limited,
空委棄於牀前	I would be useless beneath your bed.
願在莞而為影	I wish I were your shadow.
常依形而西東	I would accompany you anywhere in the sunlight.
悲高樹之多蔭	The tall trees cast a deep shade;
慨有時而不同	I can not go with you everywhere.
願在夜而為燭	I wish I were a candle to light your way.
照玉容於兩楹	I could light your face in a big room.
悲扶桑之舒光	The moment the brilliant sun rises,
奄滅景而藏明	My light vanishes,
願在竹而為扇	I wish I were a bamboo handle of a fan.
含淒颯於柔握	You would hold me pliantly to cool yourself.
悲白露之晨零	When the autumn dew falls in the morning,
願襟袖以緬邈	I have to leave you turning back to your clothes.
願在木而為桐	I wish I were a lute of Paulownia wood.
作膝上之鳴琴	I would sit cozily upon your knee, playing a melody.
悲樂極以哀來	But heights of joy turn to deepest lament,
終推我而輟音	My music brought to a halt in time and the lute pushed aside.
考所願而必違	None of my wishes are fulfilled,
徒契闊以苦心	And sorrow pierces my heart.
擁勞情而罔訴	Always worrying about it, I can not find anyone to listen.
步容與於南林	I wander aimlessly in the southern groves.
栖木蘭之遺露	The dew on the petals of magnolia relieves my anguish,
翳青松之餘陰	I tuck myself away in the shade of the pines.
儻行行之有覲	Supposing in my wandering, I could meet you again,

- 交欣懼於中襟 Joy and awe of you contend in my heart.
- 竟寂寞而無見 My love is not returned, having no chance to see you.  
獨悵想以空尋 Seeking you with impatient thought, I am alone.  
斂輕裾以復路 Holding my robe up slightly, I turn my steps homeward,  
瞻夕陽而流歎 And draw a deep breath at watching the setting sun.  
步徒倚以忘趣 I plod along without caring where I go,  
色慘悽而矜顏 My face stained with tears.
- 葉變變以去條 The leaves fall one after another,  
氣淒淒而就寒 The air turns cold.  
日負影以借沒 The sun sinks with its light and the shadows mixed.  
月媚景於雲端 The moon casts a beam of light into the clouds.
- 鳥悽聲以孤歸 A solitary bird calls sorrowfully, mournfully on its way home  
獸索偶而不還 The beasts do not want to return.
- 悼當年之晚暮 While youthful I lament the twilight of my life,  
恨茲歲之欲殫 And bewail its short span.
- 思宵夢以從之 I would follow you just in my dreams.  
神飄飄而不安 But my spirit is not quiet;  
若憑舟之失棹 I am floating in an oarless boat,  
譬緣崖而無攀 Or climbing a cliff with no footholds.
- 于時畢昴盈軒 Through the window, the stars glitter in clusters;  
北風淒淒 The north wind rises.  
炯炯不寐 I toss in bed all night with eyes wide open,  
衆念徘徊 And fanciful thoughts crowd my mind.  
起攝帶以伺晨 Sash in hand, I rise early;  
繁霜粲於素階 The stone steps are covered with frost.
- 鷄斂翅而未鳴 The sleeping cocks do not crow.  
笛流遠以清哀 I hear a flute in the distance.

始妙密以閑和	It begins legato, tenderly and gently,
終寥亮而藏摧	Followed by staccato, loud and resonant.
意夫人之在茲	You might be calling me with such a tune,
託行雲以送懷	And you might send me a message on the clouds.
行雲逝而無語	But the clouds pass without any word;
時奄冉而就過	Time flies swiftly.
徒勤思以自悲	I am so unhappy.
終阻山而滯河	There are mountains and rivers between us!
迎清風以怯累	The breeze may blow my regrets away,
寄弱志於歸波	I shall wash away my passions with the waves returning East.
尤蔓草之為曾	I reject ancient poems of secret meetings,
誦邵南之餘歌	Preferring to sing the polite ballads of ancient Zhao-nan.
坦萬慮以存誠	Admitting my foolish dreams,
憇遙情於八遐	I let my ambition vanish like the mist.

「閑情賦」について、松枝茂夫教授は次のように述べている。私はずっと以前に、たしか江戸の人情本の挿絵でだったか、女郎屋の屏風にこんな文句を張りまぜてある絵をみたことがあります一願わくは裳（もすそ）に在りては帯となり、窈窕（美女）の織身を束（つか）ねん。江戸時代のいっばしの通人でしたらきっとみな知っていた文句なのでしょう。ところがなんとこれが陶淵明の作だったと知って驚いたのはずっと後のことです。……あの淵明先生にこんな艶（つや）っぽい文句があったのか、と。同教授はまた、魯迅の言葉を引用している。すなわち、魯迅は出来るだけ其の作家の全著作を自分の目で見なくてはいけない。その上に作家の全人格、ないし彼の生活した社会の状態を考え及ぼさなければ、研究の正確さは期しがたい、と述べている、と<sup>7)</sup>。是はいみじくも、我々が此の小論の初篇から一貫して、対象とする漢詩の作家の人間性、民族性、および彼の作品の背景となった歴史とに視点を据えて詩賦の検討をし英訳してきた方針でもあったのである。

### 第三章 望郷

淵明の故郷について、吉川幸次郎教授は其の「陶淵明伝」に、九世紀白居易が、十二世紀朱子が訪れた柴桑の地は、概ね淵明が詩の中で詠んだ景觀に似た村落であったことを記して居る。他方、大正初年に諸橋轍次博士が訪れた時には、恐らく人口増加による開墾によって山川の姿



が変わり、あまり風致のある土地ではなくなって居たという<sup>3)</sup>。

何れにしろ、生まれ育った故郷の風土、遥かに見える廬山の景勝と美しい田園の風景とは、何処に居ても彼の心の中に浮かんで来たに違いない。淵明が“潯陽の柴桑の里は美しい、好きだ、帰りたい。”と旅先の詩の中で叫んだからといって、彼が其のたびに隠遁を考えて居たとは言えないであろう。若い日々における猛志とは、そんなに簡単に崩れるものではない。大正、昭和と云う近、現代にあっても、“古里は美しい、好きだ、帰りたい。”と叫ぶことで自分を慰め、励まして来た平凡な人々だって居たのである。

戦前、戦中に小中学校教育を受けた人々には音楽の時間に習った唱歌は直ぐに口ずさむことが出来る楽しい思い出の一つであろう。望郷の歌は、明治時代には外国の民謡の調べに歌詞を付けた「夕空晴れて 秋風吹き (大和田建樹: 故郷の空)」、「埴生の宿も わが宿 (里見義: 埴生の宿)」、「幾年 (いくとせ) ふるさと 来てみれば (犬童球溪: 故郷の廃家)」等の他、「犬童球溪: 旅愁」、大正時代に「高野辰之作詞、岡野貞一作曲: 故郷 (ふるさと)」がある。なかでも、「旅愁」と「故郷」とは此の年代のみならず全国民の愛唱歌であった<sup>19)</sup>。以下に其の歌詞を再録する。

### 旅 愁

- 1 更け行く秋の夜 旅の空の わびしき思いに 独り悩む 恋しや故郷 懐かし父母  
夢路に辿るは 里の家路 更け行く秋の夜 旅の空の わびしき思いに 独り悩む
- 2 窓うつ嵐に 夢も破れ 遥けき彼方に ころろ迷う 恋しや故郷 懐かし父母  
思いに浮かぶは 杜 (もり) の梢 窓うつ嵐に 夢も破れ 遥けき彼方に 心迷う  
故郷 (ふるさと)

- 1 兎追いし かの山 小鮒釣りし かの川 夢は今も めぐりて 忘れ難き故郷
- 2 いかにあります父母 恙 (つつが) なきや友垣 雨に風につけても 思いいずる故郷
- 3 志を果たして 何時の日にか帰らん 山は青き故郷 水は清き故郷

1990年初頭、筆者の一人櫻井は50数年振りに20名の小学校同級生と再会した。60数歳になった男女は、先の大戦争で多くの犠牲者を出した年代の一つに属したのであった。大部分の者は現在故郷を離れた。“戦場にあっても、他郷に暮らしても、此等の歌を歌って自分を慰め励ました。特に「故郷 (ふるさと)」の歌が好きだ”と話す多くのものが涙ぐんだ。此の歌を好きだと言っても、其れが必ずしも故郷に帰って住むのだと云う希望を示すものではない。「ふるさと」とは、心の安らぎを覚える土地、喜びも悲しみも総て純化され心の中のみ存在する土地なのである。戦争によって帰るべき土地を失った者にとっても、「故郷 (ふるさと)」の歌の第三節を歌う時、「志を果たして、何時の日にか」帰ることが出来ると思いつける処なのである。淵明が故郷を離れていた時に望郷を詠んだのも隠遁を考えて居たと言うよりも、「故郷 (ふるさと)」の歌を戦場で歌っていた日本の若者とそんなに大きな隔たりが有ったとは思われない。1980年代初期ふとしたことからSと云う台湾人の薬草研究家より手紙を貰い、台湾を

訪問した際に会った。暫らくして、彼の自宅の薬草園を見せて貰った折、彼は昔の話をした。日本統治時代の中学生の時、繰り返し激烈な日本批判をした為、東京の拘留所に送られた。其の後、脱走して大陸に逃げ、蒋介石総統の黄埔軍官学校に入り、民国軍将校になった。日本の降伏後、台湾接收軍と共に特命を帯びた憲兵中佐として帰えり、故郷の人々を驚かした。翌年二月、台湾全土に吹き荒れた独立運動を接收軍が圧殺し数十万とも云われる台湾人大虐殺が始まった時、彼は其の実状を中国本土の総司令部に報告、虐殺の中止を直接総統に懇願した。特命とは接收軍の監視であった。彼の報告は一つ残らず抜き取られ総統の手元には届かず、其の後に職務怠慢で譴責された時、彼は退役を願い出た。許可されず、月給は銀行口座に払い込まれたが、受け取らなかった。彼は身分的には今でも現役将校であり、あれ以来故郷には帰れない。沈黙が続いた後、彼は「故郷（ふるさと）」の歌を低く歌い、日本に行きたい、と言った。その後、会う機会はなかったが、1989年彼の死を知った。

歸去來兮辭并序 陶淵明

余家貧，耕植不足以自給。幼稚盈室，餅無儲粟。生生所資，未見其術。親故多勸余為長吏，脫然有懷，求之靡途。

曾有四方之事，諸侯以惠愛為德，家叔以余貧苦，遂見於小邑。于時風波未靜，心憚遠役。彭澤去家百里，公田之里，足以為酒，故便求之。

及少日，眷然有歸歎之情。何則，質性自然，非矯勸所得。飢凍雖切，違已交病。嘗從人事，皆口腹自役。於是悵然慷慨，深愧平生之志。猶望一稔，當斂裳宵逝。

尋程氏妹喪于武昌，情在駿奔，自免去職。仲秋至冬，在官八十餘日。因事順心，命篇曰歸去來兮。乙巳歲十一月也。

An Introduction to the Poem of Farewell at my Departure for Home

My family was poor and the farm crops did not allow for self-sufficiency. There were many children in my home, and the grain was scarcely enough. I was unable to find any means to make a living. My friends and relatives advised me to become a public official. Resolutely, I ventured to find such a post but it was very hard to find assistance.

Then, turmoil reigned in the country and the magistrates of the provinces opened the offices to new talents. Through the influence of my uncle who felt sympathy for my hardships of poverty, I was appointed as a county-magistrate of a small district. Those days things were still in confusion, and I hesitated to take a position far away. The district of Pengze was about 50km from my home. The crops from my stipend field seemed to yield enough for brewing my wine. Therefore, I accepted this post.

But very soon after my arrival I thought of giving up my office and going home.

Why? My inherent character was natural and candid, and I never had the will to falsify and forge against the facts. Although at that time hunger and cold urgently pressed upon me, the actions against my own better judgement aggravated my distress bodily and mentally. My previous official position involved duties only for my own keep. Thereupon, having felt disappointment and displeasure, I was deeply ashamed of myself for going against my normal tendency. Yet, I would wait for one year until the first harvest and then equip myself in a hurry to return home under the cover of darkness.

Since my sister suddenly died, I could not but rush to her burial. Without delay I resigned my office. I had already stayed in the county-office for eighty odd days from the middle of autumn to winter. The circumstances accorded with my hopes. I wrote the following poem entitled, "Farewell at my Departure for Home."

歸去來兮	On, my return home!
田園將蕪胡不歸	My field will be desolate, Why not go back home?
既自以心為形役	I have enslaved my heart to my body,
奚惆悵而獨悲	Why should I languish and grieve alone?
悟已往之不諫	Regret of things in the past can not mend matters now,
知來者之可追	The future depends on what one does now.
實迷途其未遠	I have gone astray on the path of life but not so very far,
覺今是而昨非	Now, I realize I am right but I was wrong.
舟遥遥以輕颺	My boat tosses up and down,
風飄飄而吹衣	The wind whistles and blows my clothes about.
問征夫以前路	I inquire of a boatman how far it is to my hometown;
恨晨光之熹微	Regretfully, the dawning light is too hazy to see with.
乃瞻衡宇	It is not long before I see the roofs of my gate and my house,
載欣載奔	Overjoyed, I jump down off the boat.
僮僕歡迎	The servants joyfully welcome me,
稚子候門	My children wait at the gate.
三徑就荒	Glancing over the garden, I see the paths are desolate,
松菊猶存	The pines and chrysanthemums are as they were.
攜幼入室	Taking my young children along into my room,

有酒盈罇  
引壺觴以自酌  
眄庭柯以怡顏

倚南窗以寄傲  
審容膝之易安

園日涉以成趣  
門雖設而常關  
策扶老以流憩  
時矯首而遐觀  
雲無心以出岫

鳥倦飛而知還  
景翳翳以將入  
撫孤松而盤桓

歸去來兮  
請息交以絕遊  
世與我而相違  
復駕言兮焉求  
悅親戚之情話  
樂琴書以消憂  
農人告余以春及  
將有事於西疇  
或命巾車  
或棹孤舟  
既窈窕以尋壑  
亦崎嶇而經丘  
木欣欣以向榮  
泉涓涓而始流  
善萬物之得時  
感吾生之行休

I find the urn full of wine.  
With a bottle and goblet I pour and drink some by myself;  
Looking at the shapely trees in the garden,  
my face broadens to a smile,

I lean on the southern windowsill and get comfortable,  
Keenly realizing my home gives me contentment  
even though it is very small.

The garden becomes more venerable and stately day by day,  
Though the gate always stands closed for lack of visitors.  
I wander with a cane and pause at my pleasure,  
Looking up on occasion, I sweep the distance.  
The clouds come out undesignedly

from behind the mountain peaks,  
As birds are tired on the wing and fly home to roost.  
While the sun is getting low and it becomes rather dark,  
I gently rub the lonely, lanky pine as I stop to loiter.

Oh, my return home!  
I renounce social conventions.  
Since I can not get along with the general public  
Why should I seek public service again?  
I can delight in the heartwarming talks with my kinsmen,  
And luxuriate in playing the lute and reading books.  
A farmer drops in to tell me spring is just around the corner,  
In the western fields it is about the season for farm work.  
At times I order a carriage ready,  
And at others punt to the paddyfields.  
I enter far and deep gorges,  
Or go beyond the craggy hills.  
The trees are fresh and vivid and about to bloom,  
And fountains bubble up and brooks begin to flow.  
All objects under the sun delight in their good season,  
While I feel my life coming to its rest.

已矣乎	Ah! It cannot be helped!
寓形宇内復幾時	How long can life last?
曷不委心任去留	Why not leave the heart to take its own natural course?
胡為乎遑遑欲何之	Why be in such a hurry to get somewhere?
富貴非吾願	I do not wish to rise to wealth and honour,
帝鄉不可期	Nor aspire to the immortal world.
懷良辰以孤往	When it is bright, I walk around alone,
或植杖而耘耔	Or cultivate a field, with my cane aside.
登東臯以舒嘯	Or climb an eastern hillock, whistling leisurely,
臨清流而賦詩	Or compose a verse by a clear stream;
聊乘化以歸盡	Thus I leave the heart to take its natural course and wait for the end of life.
樂夫天命復奚疑	If I accept what providence decrees, I will not worry about my fate.

既に本論の序章および上の詩の序に述べたように淵明自身は、貧乏で苦しんでいた時、生活の為県令になったが、自分の本性に合わないので着任して僅か八十日後、妹の死を口実に辞任したと言っているが、果たして、そうであろうか。彼の辞任が一時の衝動的行為であったと言われない為の負け惜しみなのではないだろうか。

淵明を敬愛し、最初に其の詩文等を編集した蕭統は、梁王朝の皇太子として行政諸制度ならびに官吏氣質などを熟知していた。太子は其の経験観察に基づいて次の理由を挙げている<sup>2)</sup>。彼の郷里(尋陽)の上級の役所から督郵(監察官)が視察にくるので、彼は衣冠束帯して出迎えるよう言われた時、「我れ豈に能く五斗米(県令の俸禄)の為に、腰を折りて郷里の小児に向かわんや」と嘆息し、即日、印綬を解いて辞職して郷里に帰ったと云うのである。吉川幸次郎教授も、彼の妹が亡くなったのは同年五月であって、県令就任以前であり、言葉をはぐらかしたものである。実際には、彼にとって甚だしく不愉快な出来事に遭遇したのであったのかも知れない旨を述べている<sup>3)</sup>。

吉川忠夫教授は其の著「劉裕」の中で、南渡過江の東晋貴族達が「王朝の高級官僚のほとんどすべてのポストを独占してしまうと……貴族の子弟たちのためには、自動的に出世コースにのれるしくみが考案され」と、彼等が自分たちの地位を保全するための排他的な身分制度を作り上げていたことを指摘している<sup>9)</sup>。当時、族門制の家格によって官吏としての上限・下限を総て規制するようになっており、貴族の子弟たちは初めから自動的に上級の出世コースに乗り、家格の低い者は武人として華々しい武功を挙げる等、余程の例外的な事態でもない限り、官吏としては下位に甘んじなければならなかった。また、九品官人法(九品の制ともいう)では県

令は第六品官，第七品官，第八品官の三種類のどれかに叙される<sup>15)</sup>。「上品」の貴族の子弟は，初任時に既に彼より上の品官の役職に叙任される。日本の国家公務員上級試験合格者，いわゆるキャリアの出世コースと，いわゆるノンキャリアのコースとを比較すればおおよその推定が付くであろう。

此の督郵事件を，晋書陶潜伝は，淵明は「素（もと）より貴を簡（えら）び，上官に私事せず」であったからと云う。東晋王朝初期における危機を救った陶侃を曾祖父に，高級官僚の名家孟嘉を祖父とする淵明は，常々きわめて誇り高く，加えて，溪族の為，恐らく賤民と陰口されて尚更に依怙地になって居たであろうから，上官，すなわち，「上品」の貴族と云うだけで上級の官に就いている若僧に頭を下げるのは耐えられなかったのであろう。

彼は，山青く水清き故郷に帰った喜びを歌って「歸去来兮辭」を作り，不潔な世の中と絶縁し，濁りきった政治の世界と訣別して，長い間考えて来た末の隠遁を実行すると決定したのであり，衝動的行為でないと述べたのであった。同時に，「閑情賦」と云う艶かしい歌の中で，「悼當年之晩暮 恨茲歳之欲殫：わたしの生命の夕暮れが近付き，残りの寿命も先が見えるのが嘆かわしい」と，突如として挿入した一節にこだわりを示した死生の問題も，「歸去来兮辭」の終句に至って超克したことを表明しているかのようであった。しかし，実際には絶縁も訣別もできなかったと言っても宜しいであろう。

後年（412），48歳の時，当時の東晋政権の最高実力者，太尉の劉裕の命に応じ幕僚となって国都の健康に一家を挙げて移住する友人の殷景仁へ送った詩の中で，「飄飄西来風 悠々東去雲……脱有經過便 念来存故人：風が西から吹いて舞い上がり，雲は東へ悠々と去って行く……もし何時か此処を通り過ぎるついでがあったら，私を思い出して訪ねて下さい（英訳略）」と歌い，彼の淋しさがひしひしと伝わって来る。五年後（417），かつて同僚であった劉裕が，北伐に出て後秦を攻め破って国王を捕虜とし，将来自ら国王となることを確実にした時，旧知の羊松齡が戦勝祝いに長安に赴く際に送った詩でも，「賢聖餘跡 事事在中都……清謡結心曲 人乖運見疏：賢人，聖人の事跡は，すべて長安・洛陽一带にしか残っていない……あの清しい歌は私の心の奥深くに何時までもとどまっているのだが，人は離れ，運には恵まれない（英訳略）」と，政治の世界から取り残された者の淋しさを伝えている。既に引用した雑詩十二首：其五，「擬古九首：其八」でも，後悔の響きを持っている。

淵明が若い時から異常なまでに拘泥した死生の問題も，彼の深層心理の中に，彼が少年時代に死を目撃して一生忘れ得ない衝撃を受けた経験があったのではないか。幼少年期における死の目撃は，時として其の人の一生を左右する程の重大な経験となりうるからである。放浪，行乞の俳人種田山頭火は，十一歳の時，父の遊蕩の為に母（33歳）が自宅の井戸に投身自殺し，引き上げられた母の水死体を見て衝撃を受けた。彼は其の一生を通じて母の死にこだわり，彼の家庭生活はなんであったかと考えさせるものとなった。「うどん供へて，母よ，わたしもいただきまする」，「ふるさとはあの山なみの雪のかがやく」<sup>16,17)</sup>。他方，女優であり歌手である

宮城まり子さんは、「私が十二歳の夏、母が死にました。『お外はとても暑いから、白いお帽子をかぶって行くのよ』と弟に言ったのが最後でした。いま私も、子供達に同じことを言っています」と言う<sup>18)</sup>。彼女は身体障害者の子供達の為に「ねむの木学園」を作り、大勢の子供達の母になっている。

ジャン・ジャック・ボワロー師はパスカルの話を用いて、あらぬ恐怖におびえるある貴婦人に慰めの手紙を書いた。「あなたのお話を伺っていると、パスカル氏のことが思い出されます。パスカル氏ほどの冷静な精神の持主でさえ、いつも自分の左側に深淵があるように感じていたのです。そこで、そちら側に椅子を置いて身を支えるようにしていました。彼の友人達や聴聞司祭が、そんな恐怖は心配無用だと言ってきかせても、無駄でした。」と。死に際して、道連れは居ない。彼は、「人はひとり死ぬであろう：On mourra seul.」と言い、姉ジルベルト・ペリエは弟の臨終の祈りを伝えている。「神よ、われを見棄てたまうことなかれ！：Que Dieu ne m'abandonne jamais!」と<sup>19)</sup>。

古い時代から「メメント・モリ：memento mori」と云う挨拶の言葉を伝えているヨーロッパに生きたパスカルである。「死を憶えよ(死を忘れるな)」と命ずる此の言葉を念頭に置いて思索したであろう彼は尚更、死に拘泥したのではなかったか。決して超克したのではあるまい。発掘された秦始皇帝陵に見るように、古代の皇帝が多数の殉葬者及び／或いは陶俑を道連れに埋葬するよう命じたのも、孤独な死への恐怖の大きさの指標であろう。陶淵明はどうであったろうか。次篇で検討することとなろう。

此等と比較すると、古代日本における望郷の絶唱と云われる日本武尊(やまとたけるのみこと)の能褒野の歌は、異質の、切なく美しい望郷の歌である。何故異質であるのか。この歌は憚ることなく、古里は美しい、帰りたいと叫んで居るからである。是は、尊が神の怒りに触れた死のきわの歌と云うことになって居るが、実際には土地の豪族との戦いに破れ瀕死の重傷を負った或る皇族將軍の死のきわの歌であったに違いない。

大和は國のまほろばたたなづく青垣山隠(こも)れる大和しうるはし

薄れゆく意識の中で、生まれ育った山青き古里をひたすらに恋うる青年皇族の思いが切々と伝わり、西洋諸国で云う白鳥の歌である。奇しくも、彼の死後、彼の魂は白い鳥となって大和へと飛び去り、其の跡を土地の人々は白鳥の御陵(しらとりのみささぎ)と呼んだと云う。

## 終わりに

先の大戦前、戦中における日本の中等教育、高等普通教育で、人間形成の為の基礎教養として日本及び東洋の古典は重要視された。敗戦後の日本では、アメリカ式教育法の実験の中で、古典及び歴史に関する伝統的教育は全て誤りとして否定された。本篇で取り上げたような古代シナ文学が現代の中学校、高等学校教育に登場する機会は殆ど無い。古典を読む事は著しく困

難になり、多くの生徒達は漢和辞典が机上にあっても利用すること自体も難しいと云うのでは、漢字を書くことが著しく困難になったのも当然の帰結であろう。

本篇で概観した東晋王朝の歴史は、現代の大陸中国や台湾の現状の由って来る原因を理解する上で重要な参考資料を提供するように思われる。陶淵明と云う大詩人の残した数々の難解な詩賦を、此等の歴史と人間性、民族性とに視点を捉えて検討し英訳する間に、これ迄とは若干異なった理解が得られたように思われる。しかしながら、此の詩人を理解する為に重要な意味を持つ「酒」と「死」とは、紙数の関係上、次篇における検討に委ねなければならない。其れ故、最終的な結論もまた次篇で討議されることになる。此処では、是迄述べたことに基づいての論議に留まる。

淵明の家族への深い愛情は、数こそ少ないが残された詩賦からも明らかである。彼は特に名を写していない、と云うことは当時の風潮から考えて女であった筈で、其の幼い末っ子の女の子への愛情をあらわにしている。当時は、妻への愛情をあらかじめ歌った唐代<sup>20</sup>とは全く異なり、なぜ解きのような表現に過ぎず、彼と共に田畑を耕し、生活を支えた妻への感謝もまた、表現はほのかである。彼は確かに酒好きであったが、家族への責任は忘れてはいなかったといえよう。隠遁と云う生き方は、彼独りの問題にとどまるものではない。彼は生涯「死」の問題に拘泥した。彼の酒好きは「死」に拘泥する心の裏返し表現であったのであろうか。

家も妻子も棄て一所不在、無一物の乞食僧となった種田山頭火は、11歳の時、母親が自宅の井戸に投身自殺し、衝撃を受けた。彼の奇妙な生き方は、母の思い出のみが純化され美化されても、此の少年期の衝撃の記憶は益々尖鋭化して彼に落ち着きの無い不安を与え続けたのではなかろうか。結婚して男子一人を儲けたが、後で戸籍上離婚し、家を棄てた。其の子は成人後毎月彼にお金を送り、彼もまた其れを当てにし、季節の変わり目には、元の妻から衣類を送って貰う。その他、友情に甘え、金が有れば酒を飲み、飲めば自嘲すると云う繰り返しの生活態度は理解し難い。彼にとっての酒と「死」の問題は、陶淵明の其れとは異質である。彼に酒の句が少ない理由かも知れない。酒を飲む辛さを伝える。其れ等は「生」の辛さを伝えているのであろうか。「おもひでがそれからそれへ酒のこぼれて」、  
「酒飲めば涙ながるるおろかな秋ぞ」、  
「酔へばあさましく酔はねばさびしく」。

陶詩は難解であるがゆえに味があるとも云われるようであるが、中国語のリズムを十分に鑑賞出来る人だけが言い得る言葉であろう。本篇では、英訳陶詩がそのような古代のリズムは伝え得ないとしても、第一篇に述べたように、作者に可能な限り接近する手段としての英語による観賞法の中で、淵明の心への接近が少しは可能であったのではないかと考える。大方の御批判を得たい。



## 謝 辞

遠藤秀造教授より中国語学、文献等について、多大の御助言、御援助を頂いた。中国人の習慣、気質等について、同教授ならびに同夫人より御体験に基づく、有益な御助言を頂いた。心から感謝を申し上げる。

## 文 献

- 1) 松枝茂夫・和田武司：陶淵明全集。a) 上巻, b) 下巻。岩波書店, 1990。
- 2) 蕭統：陶淵明伝。1-a), pp12-26。
- 3) 吉川幸次郎：陶淵明伝。中央公論社, 1989。
- 4) 櫻井, 大木, Alexander：東と西：漢詩英訳の試み。本誌, 3, 59-68, 1989。
- 5) 櫻井, 大木, Alexander, 呂泉生：「漢武帝の愛」東と西：漢詩の英訳。本誌, 4, 25-48, 1990。
- 6) 李長之著, 松枝茂夫・和田武司訳：陶淵明。筑摩書房, 1966。
- 7) 松枝茂夫：陶詩のすすめ。1-a), pp257-263。
- 8) 魯迅著, 竹内好編訳：魏晋の気風および文章と薬および酒の関係, 1927, 魯迅評論集, pp163-190, 岩波書店, 1981。
- 9) 和田武司：陶淵明 一人と作品。1-b), pp253-275。
- 10) 吉川忠夫：劉裕。中央公論社, 1989。
- 11) 越智重明：晋書。明德出版社, 1945。
- 12) 連根藤：中国人のはらわた。はまの出版, 1989。
- 13) 劉義慶著, 竹田晃訳：世説新語。学習研究社, a) 上巻 1982, b) 下巻 1983。
- 14) 小尾郊一：中国の隠遁思想。中央公論社, 1988。
- 15) 野ばら社編集部：唱歌。野ばら社, 1983。
- 16) 大山澄太：生死の中の山頭火。春陽堂書店, 1988。
- 17) 村上護：放浪の俳人山頭火。講談社, 1988。
- 18) 毎日新聞, 余録。1989年10月20日。
- 19) 松浪信三郎：死の思索。岩波書店, 1983。
- 20) 例えば, 元稹の亡妻への数多い「悼亡詩」の中の「遣悲懷三首：其二」は有名。

## 別章

## 漢詩英訳の検討

前号同様漢詩英訳の検討経過を、以下の2篇を選んで述べる。

## 酬劉柴桑 Autumn in the Countryside

「窮居寡人用」 「窮居」はliving remoteであるが、remoteという形容詞は、叙述用法のときはremote from...と起点となる場所をfromの後に特定しないと不自然な表現になる。そうでなければ、living in a remote placeと制限的用法にする必要がある。その意味では、responsibleなどと似ている。a responsible man; the man is responsible for the work. といった具合である。

「慨然已知秋」 「慨然知」は、realize 1語ですませることが出来る。ちなみにこうした基本語を最も木目細かく定義している最新の辞書として知られているCOLLINS COBUILD ENGLISH LANGUAGE DICTIONARY (以下COBUILDと略記する)は、If you realize a particular fact, you understand or become aware of it, either by thinking about it and connecting together the information you have, or a result of discovering new information. とrealizeを説明している。訳詩前行のFindingと連動して、「慨然知」という感じをかなり伝えていると思う。なお今回の漢詩訳の検討においてほとんどの場合英語語句の定義にCOBUILDを参照している理由は、既述の如くこの辞書が最新のものでしかも基本語の定義に最も木目細かな解説を施しているからであるが、例えばrealizeの解説に、Webster大辞典(Third International)は、言い換えを含めても10語、Oxford大辞典(OED)は19語を使用しているのに対し、COBUILDは、26語を充てている。

「新葵鬱北」 新葵は、あらたに植えられた向日葵という意味ならnewly-planted sunflowersであるが、秋に新しく栽培するとは収穫の点から考え難く、ここでは新米の新と類似した用法で種をいっぱいを持った向日葵であろう。この意味を伝える語としてseedyという簡潔な語があるが、これは例えば種が多くて食べられないようなorangeなどについて使う言葉であり、しかもこの用法もごくまれで、通常はseedyはshabby, decayedなどの意味を表しlow classの印象を与える語である。後述のS音で始まる語についての解説を参照されたい。COBUILDは、この意味を記載していない。したがってseedyのかわりにpacked with seedsまたはfull of seedsと訳さざるを得ない。

「今我不為樂」 unless I enjoy myself nowの意味であるが、感情を込めてif I miss this best of seasonsとした。missはfail to enjoy or take advantage ofの意味である。

「知有来歳不」 「知」は「不知」の意味であるから、Who knowsという反語的表現を使ってno one knowsの意味を表わした。「来歳」はnext yearであるが、前行のthis best of

seasonsを受けてthe nextとした。

「帰去来兮辞」 The Poem of Farewell at my Departure for Home

「帰去来兮辞」の「辞」にいかなる英語を当てたらよいか、かなりの時間を掛けて検討した。valedictory (=farewell speech) が先ず候補に挙がった、Webster's New World も especially at a graduation と補足しているように、この語には卒業式のイメージが付き纏うということで最終的には採用しなかった。salutatory という語もあるが、この語はむしろ初めの挨拶を意味するので適さない。結局意味をとって平凡に poem とした。

「既自以心為形役」 「心」を heart, mind, spirit, soul のどの語に訳すかを決めるのは必ずしも容易ではない。いずれの語の意味をも部分的に含んでいるから脈略によって決定するしかないが、一般的に heart の存在が心臓のある胸のところで情緒を感じる所、一方 mind は頭脳にあって知性の宿る所とされている。したがって「心」は、heart と意味が重なる部分が最も大きいと言える。ここでも、heart を使って、I have enslaved my heart to my body. と訳した。COBUILD の heart の定義は、the place where your deepest and strongest feelings and emotions are となっている。

「舟遥遥以輕」 舟が縦に、横に、あるいは前後左右に揺れるさまを、英語ではそれぞれ The ship pitched/rolled/rocked. と表わすが、木葉のように波に揺れることは、The ship tossed like a cork. という。唯、揺揺という意味にとるか、遥遥という遥かに開かれた面を行く様をとるか、ここでは進み行く意味で揺れる表現を採用した。

「恨晨光之熹微」 「晨光之熹微」は、the dawning light is too hazy to see through と訳したいが、英語の発想では、暁のかすかな光によっては良く見えない、というふうに捉えて to see through でなく to see with とした。

「園日涉以成趣」 最も英語らしい表現にすれば、人間名詞を主語にたてて I appreciate the garden more day by day. となるが、原詩の発想と余りに掛け離れるので the garden を主語にして原詩の構造に近付けた。「成趣」は、becomes elegant/tasteful も考えられるが、ここではやや軽い感じがするので becomes venerable and stately とした。ちなみに COBUILD は、stately を impressive because it looks very graceful and dignified と定義している。

「泉涓涓而始流」 「泉涓涓」は、泉の水がちょろちょろと流れ出る様を表わしている。したがって fountains trickle としたいが、英語では fountains は bubble up するものと捉えるので、And fountains bubble up and brooks begin to flow. とした。a murmuring brook とか、The brook murmured under the ice. (Webster's Third International) という表現は、時折見掛けるものであり、例えば研究社の大英和辞典にも、第1の定義に「ざわめき、さらさらという音: the murmur of a brook 小川のさらさら流れる音、と説明しているが、同音の反復という音学的には全く同じ形態をとっている murmur と「さらさら」は、感覚的に

はむしろ対照的な言葉であることに注意しなければならない。

概して日本語では、サ行の擬態語（擬態語以外の一般の語彙についてもある程度言えることである）は耳に心地好い響きを持つ。「さらさら」「すくすく」「すやすや」「するする」などがその好例である。一方 murmur は、抑えられたような、不快な響きを有する。同音反復語ではないが同様に不快な響きを有する onomatopoeic な語に、mumble, munch, mutter などがある。moan, mourn などでも不快な響きを持つという意味では、同じ仲間に入れてよいであろう。著者の一人 Kelley にとっては、murmur という語で先ず連想するのは心臓の雑音や人混みの中のがやがやという声である。murmur が gentle complaint の意味で使えるのも、こうした不快な響きのためであろう。参考までに、日本語のサ行の擬態語とは反対に、英語の S の音（いわゆる hissing and hushing sounds）で始まるオノマトペ的な語は、好ましくない意味を持つことが多い。screech, scroop, scutch, simper, slump, smash, sniff, snore, snort, squeal などその例は多い。

「帝郷不可期」 「帝郷」は仙人の住むところであるが、仙人を英語で解説することから始める訳にも行かないので、不老不死の人の住む世界と考え the immortal world とした。

「樂夫天命復奚疑」 「天命」 providence, COBUILD によれば an external force, for example a god, which is believed by some people to arrange our lives and the things that happen to us. したがって、providence 1 語でも良いであろうが、意味を明確にし、If I accept との繋がりをより良くするために what providence decrees とした。Providence と capitalize すればキリスト教の神を表わす。

中国語の発音については紙数の都合で、次篇で「酬劉柴桑」「歸去來兮辭」の発音を記載する予定である。

平成3年1月21日受理